

「宇治十帖を読む——薫大君の物語」

安 藤 和 幸（助教授・一般教科）

要 旨

『源氏物語』宇治十帖は人の世、心の真実を求めて書かれた。その探究に仏教の因果・縁起思想が中心をなした。それはわれわれの思念の根本となる因果律とは別のものである。

とどのつまり、何が真実なのか。正しくない、正しい、その区画を決めるのは何なのか。人が充実した人生、幸せな人生を目ざして生きていくうえで、そうした問いかけをすることは、いつの時代も変わらない。

よりよく生きるためによりよく考える、愚かな思念でなくすぐれた心の働きであること、その要件として大いなる知恵があること。この理解も千年の時を隔てても同じであろう。自分の思いなしがまっとうなのか不十分なのか、愚かなのか賢いのか、見極めは容易でない。自分の思慮を尽くしてゆくよりない。しかしさまざまなかわりに生きていくのだから、自分の思うようにはならない。そこに苦しみが生じる。自分と他人との隔て、障壁。それぞれが思うところは異なる。その思うところ、その思う自己がもつとも鮮鋭に問われる男女の愛。

自らの思いを進めるのか、断念するのか。自らが受入れられるのか拒絶されるのか。燃え盛る情欲に愛する人をあやめたり、自らのいのちを絶つことにもなる。だから自らを制御する、他人との宥和をとる。それ

が分別、明らめ。しかし諦め。くすぶる思いを抱え込む。これとて毎日のあれこれの営みに自らの思いと同様ばやけていく。時にばやき、薄められた苦渋をこんなもんとなだめる。真実は垢まみれがちとなる。

光源氏を中心として、この世の人の有りようを隈なく描いて浩瀚な物語を書き終えた作者は、光なきあとの世界を書きついだ。この世に生きる人の心の隈に焦点を当てて。宇治十帖の薫・大君の物語は、二人の思いのことごとくを描き出そうと企図された。それが、それまで巻ごとに絶えず新しい地平に分け入ろうと書き綴ってきた作者の、更なる試みであったと思う。この世の真実、この世を生きる人の心の真実は何なのか、との問いに向かう。作者には齢を重ねてのあまたの経験を経た己が思量と言葉の他に、大きな導きの糸、つまり仏教思想があった。

宇治十帖の「橋姫」「椎本」「総角」の三帖を中心に読むことで、右の概要を掘り下げてゆきたい。

源氏物語続篇の始発「匂宮」巻は、「光隠れたまひにし後」「当代の三の宮」(匂宮)と「その同じおとどにて生ひ出でたまひし宮の若君」(薫)が語りおこされていくが、「いとまばゆき際にはおはせざるべし」とある。テキストに用いる小学館日本古典文学全集の頭注は「以下、匂宮や薫のあり方が源氏に比べて格段に現実性が濃い点に注意」と。すでに大部において書き終えられた光源氏の物語がより現実世界に近づいた物語に向かうものであることが言われている。それまでの主人公光源氏の超絶性が削ぎ落とされて、現身の人に近づけた新主人公薫であり、匂宮である。と言っても、薫の身体から発する芳香は「百歩の外もかをりぬべき心地しける」等「いとこの世の人とはつくり出でざりける」との卓越性は備えている。更に自らが父光源氏の実の子ではないことを疑う薫、通釈では実父を亡き柏木と察知していた薫は、なに不自由のない栄耀のなかにありながら憂愁の人として、その苦悶の救済を仏道に求める人として語り出されている。

「何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子(河内本は瞿夷太子)のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」と「独りごつ」薫。「ぜんげうたいし」は未詳、「くいたいし」は「釈迦の子羅喉羅を言い、母瞿夷の胎内にあること六年、父の出家後誕生して実子か否か疑われた」と頭注は示す。続く「おぼつかかな誰に問はましかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ」の独詠歌を頭注は、「薫自身の出生への懷疑を、仏法に説く生死無始無終の道理に託して表現」と記している。その後にも薫は「いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるかとも見ゆること添ひたまへり」と、菩薩の託胎になずられたりしている。母女三宮が出家しているもて育った、その出家は薫の出生ともからんだ「思はずなりける事の乱れ」を推測し、母の成道を助けるため、「安からぬ思ひにむすばはれている」亡き父の霊ではないか、そ

の霊を弔う追善のため、修行を重ね功德を得て共に御仏のもとに赴き「对面せまほしき」と出家を願う薫であった。

更に薫の人となりについて、「顔かたちも、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしう恥づかしげに、心の奥多かりげなるけはひの人に似ぬなりけり」と、光源氏の実子でないことをこめつつ、「恥づかしげ」が言われている。これは「なつかし」と対をなす言葉であろうが、薫について「なつかしう」(匂宮P二五)と表現され、「竹河」では、「なつかしく心恥づかしげになまめいたる方は、この四位侍従の御ありさまに似る人ぞなかりける」(P五八)とあったり、玉鬘に「恥づかしげなるまめ人」と言われたりしている。この「恥づかしげ」は後に八宮大君の薫を忌避する述懐の一つ、「この人の御さまの、なのめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつましきに、わが世はかくて過ぐしててむ」(総角P二三〇)や「恥づかしげならむ人に見えむことは、いよいよかたはらいたく、いま一二年あらば衰へまさりなむ」(総角P二七一)ともち越される薫の特性の一つと認められる。

また、「心の奥多かりげ」もこの後の薫の性格や行動の人物像を規定してゆく特性となる。大君も亡き後その女房に「うはべには、何ばかりことごとしくもの深げにももてなさせたまはで、下の御心の限りなく、何ごとと思すめりしに」(総角P三三四)と言われる性格で、似合いの二人とは言えるが、物語は求める薫と拒む大君とあやにくに、もしくは悲劇として展開してゆく。この結ばれぬ恋の設定において、先の「現実世界に近づいた物語」は、心の奥深くに分け入ってこの世の真実、仏教でいう諸法実相、法性を探究しようとしたと思われる。

続篇の始まりで憂愁の人として描かれる薫は、「世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつましくなど思ひ棄てたまふ」(句宮P二三)と、「俗界のことを念頭から捨てて道心一筋になる。雑念を捨てて仏道に専念する」とも説明される「思ひ澄ます」薫の心で、出離の絆となる係累(妻子)や愛欲を持つまいとしていた。しかし語り手はすぐに続けて「さしあたりて、心にしむべき事のなきほど、さかしだつにやありけむ」と揶揄している。「身を思ひ知る方ありて、もののあはれなどもありければ、心にかせてはやりかなるすき事をさをさ好まず、よろづの事もてしづめつつ、おのづからおよすけたる心ざまを人にも知られたまへり」と言われる十九になつての薫であるが、「なほざりの通ひ所もあまたになる」と、厳格な禁欲ではなく、「道心を志向する薫も、夕霧以上に女性関係は多いが、当時、男が好色か否かは、身分の懸絶した下層の女性相手では必ずしも問題にならない。薫の道心が破綻しないゆえん」と頭注は記している。

係累を持つまいとの薫は、句宮が「年にそへて心をくだ」く冷泉院女一宮と同じ邸宅に育ち、「同じくは、げにかやうならむ人を見んにこそ生ける限りの心ゆくべきつまなれと思ひながら」「わづらはしければ、あながちにもまじらひ寄らず」(句宮P二四)とあるが、やがて大君への恋慕、大君亡き後中君や浮舟を求めたり、今上帝の女二宮の婿に迎えられる幸いを得ても姉一宮への憧れがやみがないとの展開をとる。抑制の思いを越えて、手にしていないことを手にしたいとの欲情が語られていく。「さしあたりて、心にしむべき事のなきほど、さかしだつにやありけむ」の言葉どおりになっていく。「道心の破綻」が見られる。この変節をどう読むか。

「橋姫」巻は、「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」とはじまり、北の方を失つて二人の姫君と暮らし行く様が描かれたあとで、「源氏の大殿の御弟におはせしを、冷泉院の春宮におはしましし時、朱雀院の太后の、横さまに思しかまへて、この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりたまひける騒ぎ」と正篇になつた事件が語られている。この画策が失敗し、宮は凋落し、「この年ごろ、かかる聖になりはてて、今は限りとよろづを思し棄てたり」と語られる。隠遁者風の有りようが宮邸が焼けて「世を憂し山と人は言ふなり」の宇治に住まうことで、また「聖だちたる阿闍梨」との結縁を得て「俗聖」と評されていた。「この阿闍梨は、冷泉院にも親しくさぶらひて、御経など教えきこゆる人」であつたことで、「行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れと人知れず思ひつつ、俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに」と薫の心を惹くところとなり、八宮も阿闍梨に薫の道心のほどを聞いて「心恥づかしげなる法の友」と感嘆させられたりして、二人の交誼がはじまる。「たびたび参りたまひつつ、思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、いとよくのたまひ知らず」。「仏の御教をも、耳近きたとひにひきませ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人はものの心を得たまふ方のいとことにものしたまひけれ」と。このように語られる二人の話し合いの内容や八宮や薫の仏法理解がどのようなものであつたかは、具体的には語られていない。元服前に「善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」と願つた薫、比丘尼の母を「明け暮れ勤めたまふやうなめれど、はかなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはんことも難し。五つの何がしもなほうしろめたきを」と思い、自分も出家して母の本願を助けたいと発心した薫であつたが、こうした思惟が生まれる背景には仏典に親しんで

の素養があった。河内本は「善巧太子」を「瞿夷太子」とする、その瞿夷太子の話や「五つの何がし」と言われている、女人の成仏の妨げとなる五障は、共に『法華経』にある。他に当時、貴族の間でよく読まれたという『阿弥陀経』をはじめとする諸経論や、横川恵心院僧都源信の手による、山となす一切経の精髓を織り込んだ『往生要集』が、八宮と薫の求法の資であったのだろう。大君や源氏物語の作者もそうだったろうが、それぞれがどのように経論文を把握して己が思想としていたかは具体的に物語のなかに見ることはできない。

三年の訪れを経て、秋も終わろうとするある日の未明に薫は馬で宇治へ向かった。

「入りもてゆくままに霧りふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷やかに、人やりならざしく濡れたまひぬ。」

山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな」

もの心ついてからの薫の憂愁は、仏道に分け入っても依然晴れないままで、宰相中将としての公務をぬい都を隔てる隘路をおして宇治八宮との法談へと向かう道すがら、吹きすさぶ木枯らしに木の葉からふりかかる露よりもこぼれやすい我が涙を「あやなく」と薫は詠じる。辞書は「判然としないさま、理性ではつきりと限定・制御できぬさまをいう」と。

テキストの頭注は「あやなしは、道理にあわぬこと。涙を自分の意思を超えた不条理のものとす。晩秋の落葉する自然の中に自己を布置せしめながら、人間の運命の不可知さを観じた歌」と深い内容を言っている。

自らの涙をいぶかる「あやなし」は、次々に舞い落ちる木の葉のはかなさでこの世の無常が、冷たい露がからだまでしみ入る、そのように我が身の上を嘆かしくする憂い、その憂いがこれからも続くと思えることが

直感されての言明であろう。

八宮邸からは琵琶と琴の音が聞こえていた。くつろぐ二人の姫君を霧のなかに見た薫。「昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、必ずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむ、と憎く推しはからるるを、げにあはれなるものの限ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし」と。「薫の心に姫君への執心が惹起されて不思議はない、とする草子地」と頭注は記す。折しも八宮は阿闍梨の寺での念仏会に赴いていて、不在であった。薫は初めて大君と対面することになる。「世の常のすきすきしき筋には思しめし放つべくや。さやうの方は、わざとすすむる人はべりとも、なびくべうもあらぬ心強さになん」と薫は自らの清廉を述べ交誼を求めるが、大君は老女房と応接を代わる。この弁が亡き柏木の乳母子であるなど「古物語」を切々と語るが、姫君の御簾の前であることがはばかられ、話の残りはいずれと切り上げ席を立った薫は、「峰の八重雲思ひやる隔て多く」と都を隔て閉じた空間の宇治で更に閉じた境涯を生きる姫君たちの労多き思い、その心ばえが「いと奥まりたまへるもことわりぞかしなどおぼゆ」。「あやしき舟どもに柴刈り積み、おのおの何とはなき世の営みどもに行きかふさまどもの、はかなき水の上に浮かびたる」を見て、「誰も思へば同じごととなる世の常なきなり。我は浮かばず、玉のうてなに静けき身と思ふべき世かは、と思ひつづける」。求法をこととしてこうして宇治まで来たっている、また長年求法につとめてきた自分だが、この世に生きる限り「諸行無常」の理を逃れることはできないとの感懐が言われ、この先悟りを得ての寂靜が可能なのかと疑っている。

帰京しての薫は「古い人の物語、心にかかりて思し出でらる」。また、二人の姫君が「思ひしよりはこよなくまさりて、をかしかりつる御けは

ひども面影にそひて、なほ思ひ離れがたき世なりけり、と心弱く思ひ知らる。愛執の心はあるまじきことと持戒してきたが、それまでの生き方を誇る我が心ながら恋情をおしとどめることができないでもろく崩れゆくようにしていることを薫は自認している。心一つにおさめかねること、薫は匂宮に話す。「いと世づかぬ聖さまにて、こちごちしうぞあらむと、年ごろ思ひ悔」つていたが、月影に見た姫君たちは物腰といい姿かたちといい理想的と思えた。興をそそられた匂宮に薫は「しばし世の中に心とどめじと思うたまふるやうある身にて、なほざりごともつつましくはべるを、心ながらかなはぬ心つきそめなば、おほきに思ひに違ふべき事になむはべるべき」と年来の信条を口にすると、「いで、あなことごとし。例のおどろおどろしき聖ことば見はててしがな」と笑われる。聖人の取り澄ましはいずれ豹変するだろうとからかわれ、その予言どおりに薫は妄執の人になっていく。

十月五六日に八宮を訪ねた薫。「さきさき見したまへる文どもの深きなど、阿闍梨も請じおろして、義など言はせたまふ」とある「文ども」は仏の教えを記した教典ばかりでなく、その教典の意味内容を解釈した義疏や仏説を論じた書、例えば龍樹偈・鳩摩羅什訳『中論』や青目釈・鳩摩羅什訳『中論』といった書もあったであろうと推測する。

くつろぐなかで八宮は「今日明日とも知らぬ身の、残り少なさに、さすがに、行く末遠き人は、落ちあふれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世に離れん際の絆しなりけれ」と自ら亡き後の姫君のことが言われ、ご安心下さいと薫は後見を明言している。

宮が晨朝の勤行に入り、薫は弁から出生の秘密を聞く。帰宅して渡された袋を開くと、母三宮の返書五六通と実父柏木が死の床にあってわが子の将来を見届けぬ無念を嘆く詠歌を見た。大きな衝撃を受けるが、父の文を見ての思ひは「よくぞ世間の知れぬところとなった」との危惧で

あり、「心に籠めてよろづに思ひるたまへり」と体面をとりつくろう。ここで「橋姫」巻は終わる。

年来の出自の不審が解かれた、もの思わしさのものが明らかにあったのだが、この若き日の実父と母のあやまちがこのあと深く反芻されることはない。いくらかはある。「権本」巻で中納言に昇進した薫は喜ぶでなく、「世の営みにそへても、思ふこと多かり。いかなる事、といふせく思ひわたりし年ごろよりも、心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへさまの思ひやらるるに、罪軽くなりたまふばかり、行ひもせまほしくなむ」(P一七〇)と「匂宮」巻で語られたことが繰り返され、八宮がなくなつて弁との対面で「さるは、おほえなき御古物語を聞きしより、いとど世の中に跡とめむともおほえずなりになりや」(P一九一)と薫は出離の思いのましたことを語り、「古人の間はず語り、いと恥づかしげなめる御心どもには聞きおきたまへらむかし、と推しはからるるが、ねたくもいとほしくもおぼゆるにぞ、またもて離れてはやまじ、と思ひ寄らるるつまにもなりぬべき」(P一九二)。きっと姫君たちの耳にも入っているだろうから、秘事を封じるために我がものとしなくてはと思うことが言われている。係累の絆しを厭うのとは逆の、つつがなくあろうとする俗世の思いが露出している。この「もて離れてはやまじ」は、八宮が自らの死を感じ取って、姫君の後見を薫に依頼し、その後姫君とも話をかわすなかで父宮になかば結ばれることを許されながら「わが心ながら、なほ人には異なりかし、さしも急がれぬよ」と薫は自らの心を認めつつ、大君が他人の妻となることは、「さすがに口惜しかるべう、領じたる心地しけり」(P一七三)とあることを受けている。かわりを重ねるなかでしだいに大君に薫は執著を深くしていくことが語られている。

八宮がなくなった歳暮、大君との語らいで薫は「かやうにてのみは、え過ぐしはつまじ、と思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、な

ほ移りぬべき世なりけり、と思ひぬたまへり」(P一九八)。心の隔てを取り払って一つ身に向かおうとする自らの情念を「うちつけ」と捉えている。辞書は「ある事に触発されて、その反応が即時に生じるさま。契機に対し、無媒介的、反射的に反応があるさま」と。心のうちから衝き上げてくる強い力を認め、制御がかなぬ思いを感じたということだろう。男と女の間を言う「世」。世を厭う道心がひび割れている。句宮への返り文はお二人のどちらの手によられたのかと薫が問うたのに、大君はもし自分が筆をとったなら胸つぶれる思いを味わったろうと返答に窮し、歌を書いてさし出した。薫は自らの思いを「つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまずやわたらむ」と口にする。句宮を案内かたがた、私がまず渡りましよう。当時の理解では、「渡る」は男と女が一つ身になることを意味していた。大君は「思はずに、ものしうなりて、ことに答へたまはず」と。潔癖と言える大君の心。「おのがものとはうち頼みながら、女の心ゆるびたまはざらむ限りは、あざればみ情けなきさまに見えじ」(P二〇七)とのどかに構える薫だが、「椎本」巻末で薫が垣間見た姫君たちの姿が語られ、薫の恋情が燃えさかることが読むものの想像に与えられる。

「橋姫」「椎本」巻と薫の道心が恋心に変節していくことを見てきた。目にふれこれにつけてしだいに大君に執著していく薫。母なくしかるべき後見人のないまま、優婆塞の父のもと深窓に育った大君は世づかぬことにおいて潔癖頑なであり、まずは実らぬ恋となるのが物語の展開の上で布置されている。

「総角」巻は八宮一周忌法会の仕度にかかっていることから語られる。薫は喪明けの恋の成就を心待ちにしている。句宮が中君と結ばれることを切望していると話すことで、薫は大君の頑さをどうにか解こうとす

る。何事によらず分別のおくれております私のさが、深山隠れの朽木と任じようと思うが、妹についてははしかるべき方との幸せをとりはかりたいものと大君は真情を語る。弁との語らいで薫は、出世間を願って宇治に通うようになったが、八宮から姫君を委託されとりなすが、大君の「心ばへ」が「いといとあやにくにもの強げなる」と嘆き、「いといあやしき本性にて、世の中に心をしむる方なかりつるを、さるべきにてや、かうまでも聞こえ馴れにけん」と、「さるべき」つまり因果、縁起を自らの変容の理由として言っている。仏の教えの根本とも言われる「あれある故にこれあり」の因果。いつの世であれ、人の分別のもとになる。しかし現実象をどれだけ理で解せるのか。人間の事実もしくはその心の内実を理論的に理解できるのか。人の分別は限定されたもの、それを超える計り知れなさがあることが当時は考えられていた。これが拡大され、この世のみならず、前世からの因縁とこれも解釈されるが、作者もそう考えていたのかどうか。社会通念や薫の思いとは別だったのではないか。ここまで作者は丹念に「あれある故にこれあり」の因果を現実即して展開してきている。この先更に、薫・大君の心のうちにさらに深く分け入って、この理を紡ぎ出してゆく。思いの限りを語り出し尽くす。そうして見えてくるものを描く、あるいは新たな地平へと踏み入る志向があったと思われる。

弁は他の女房の言葉を示す。零落した宮家なのだから体面や自尊をすて体のよい生活をとれと。しかし大君は頑として聞き入れない。中君を句宮でなく薫と結ばれることを大君は願っていると弁は話す。薫は翻意はありえないこと、「ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなん」と大君に訴えるように語る。これまで親兄弟をはじめとして、心から語らう人が自分にはいなかった

た。心に思うことをうちにこめては、「うらめしくもいぶせくも」あると。

夜も更けて薫は「屏風をやをら押し開けて入りたまひぬ。いとむくつけて、いみじくねたく心憂ければ、隔てなきとはかかると言ふらむ。

めづらかなるわざかなと、あはめたまへる」大君。薫は「かの物の音聞きし有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを、いと多く聞こえたまふに」大君は「恥づかしもありけるかな、

とうとましく、かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひけるかな、と聞きたまふこと多かり」と、二人の異なりが鮮烈にされる。霊前ゆえ、

また厚情の人ゆえ強引な行爲に出ることを薫は思いとどまる。大君は「ながらへば心の外にかくあるまじきことを見るべきわざにこそはと、もののみ悲しくて、水の音に流れそふ心地したまふ」。この後、薫の本懐を忌避し中君と薫が結ばれるよう腐心する大君の確執と何とか我が思いを遂げようとする薫の確執との軋轢が展開していく。物語を読むもの聞くものを魅了させる。それが物語のいのちだろうが、その底にあるもう一つの主動機、つまり作者が語ろうとしていることを考えてみたい。

喪明けに薫が訪れても、大君は会おうとしない。大君は中君に薫との結婚をすすめるが、うべなう中君ではなかった。結婚をとりはからったり、困難な状況にあつてしかるべくことをすすめていく後見人をもたない自分、自分の思いを踏みにじろうと画策している女房たちを大君は痛感する。「宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば」と大君は思つたりする。薫の寝所への侵しをそれと予測してのがれる。この時中君が臥していて薫はその人と知って、「この一ふしはなほ過ぐして、つひに宿世のがれずは、こなたさまにならむも」と思ひます」。老女房たちはとうとう大君と薫が結ばれたと喜び、それまでの大君の頑さを「世の人の言ふめる恐ろしき神」がついているのかと一人が言い、それをたしなめていま一人が「ただ、人に遠くて生ひ出でさせたまふめれば、か

かる事にも、つきづきしげにもてなしきこえたまふ人もなくおはしますに、はしたなく思さるるにこそ。いま、おのづから見たてまつり馴れたまひなば、思ひきこえたまひてん」と話す。男と女の愛について教える人も二人をしかるべく引き合わせる人もなかった大君。でもいずれは世の人のように受け入れていくことになるでしょうと。繰り返される人の世の常を言っているが、大君はついに受け入れることなく、心の隔ての向こうで思い入れをつのらせてゆく。薫は別の日中君に匂宮を導いて、大君にせまる。匂宮のことを聞いた大君は憤りを示す。「宿世などいふめるもの、さらに心になはぬものにはべるめれば」と薫はとりなすが、

「こののたまふ宿世といふらむ方は、目にも見えぬことにて」と切り返し、拒みとおす。先には「宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば」と思つた大君であつたのに。こうした大君の言葉はあとでとりあげたい。匂宮と中君との結婚に老女房は「思ふやうなる御宿世」と喜ぶが、大君亡きあと「思ひの外なる御宿世にもおはしけるかな。かく深き御心のほどを、かたがたに背かせたまへるよ」と嘆いたりする。

今上帝皇子と凋落した宮家皇女との婚姻は不釣り合いであるが、宮家の誇りはあることで大君はやがて「人わらへ」となつて父の霊を傷ましめる罪に苦悩し、死を選びとつてゆくと物語は進んでゆくが、主動機を考える資を見てゆく。

参内した薫が今上帝女一宮を思つて、「すいたる人の、思ふまじき心つかふらむも、かやうなる御仲らひの、さすがにけ遠からず入り立ちて心になはぬをりの事ならむかし」(P二六八)と内省する。契機がなければ恋心は燃え立たないが、おかしてはならない相手でも、その禁戒が心ふさぐため心は逆におかしに向かうという理が言われている。実父と母のあやまちもこうしたことで理解されたのだろう。「心になはぬ」ところから彼方へ向かおうとする。これが源氏物語の人間理解の基本の一つ

と言えるであろう。

大君の重態を知った薫は、「例の、阿闍梨、おほかた世に驗ありと聞こゆる人のかぎり、あまた請じたまふ。御修法、読経：初夜よりはじめて、法華経を不斷に読ませたまふ。声尊きかぎり十二人して、いと尊し」(P三〇六―三〇七)。「常不軽、そのわたりの里里、京まで歩きけるを：回向の末つ方の心ばへいとあはれなり」(P三一一)。当時の仏教の姿であるが、本来の仏の教えに違う。

「世の中をことさらに厭ひはなれねとすすめたまふ仏などの、いとかく、いみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにものの枯れゆくやうにて」(P三二八)大君は息を引き取る。「まことに世の中を思ひ棄てはつるしるべならば、恐ろしげにうきことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせたまへ、と仏に念じたまへど、いとど思ひのどめむ方なくのみあれば」(P三二九)は『往生要集』の「究竟の不清」の記述を思わせる。亡き人の変化してゆくさまを描く『摩訶止観』の引用。潰れ爛れ、無数の蛆が群がる様は見ることができなかった。

薫は大君を偲んで歌を読む。「恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし 半ばなる偈教へむ鬼もがな、ことにつけて身も投げむ、と思すぞ、心きたなき聖心なりける」(P三三三)。頭注は釈迦の前身である雪山童子の故事をのせる。「雪山童子は羅刹(鬼)に身を変えた帝釈天から、「諸行無常、是生滅法」という偈の半分を聞き、残りを知りたければ人肉を供えよと求められて、谷に身を投げて残りを教えられたという。『大般涅槃経』巻十四その他にもみえ、法隆寺藏玉虫厨子の台座にもその絵がある。「心きたなき聖心なりける」と頽廃した薫が言われている。『往生要集』は「雪山の大士は全身を捨ててこの偈を得たり」として「諸行は無常なり これ生滅の法なり 生滅の滅し已れば 寂滅を楽しみとなす」(P四八)をのせる。(テキストは岩波書店日本思想体

系6 『源信』石田瑞麿訓釈

源氏物語が書き終えられて百五十年ほどして書かれた『沙石集』は、書き出して源氏物語が「物ニヨセツクル事ナレドモ、或ハ世ノ人ノ情ケ有事ヲ思ヒ、或ハ仏法ノ義門ヲ弁エシメンガタメニ、其跡ヲノコス。是モ見聞カン世間ノ事ニ付テ、出世解脱ノ道ヲシラシム」と叙している。

『沙石集』はどういう点でそう言えるかは説明していない。私がそうであると首肯できたとしても、その説明は困難をきわめる。私自身の限定された理解で源氏物語をどれだけ読みとれるのか、仏教思想をどれだけ把握でき説明できるのか。理解を生む心の内実や事と言葉の、あるいは自と他の齟齬を考えていたりしては、帰結のない探究となる。源氏物語の作者にしろそうだったろう。ある状況に生きる人物設定において心の内実や生きざまが問われ、形象化されていった。無数のものごとを限定しては本来のものから離れる。いや無数のものごとがあるということと自体が矛盾を生じる。大きな流れのなかでともかくも存在し、ことをなしていく。思うにまかせぬ苦しみを出る解脱を希求したりもする。

『往生要集』「竜樹菩薩の、禪陀迦王を勧発せる偈に云く、…煩惱の駛河衆生を漂はし 深き怖畏、熾燃の苦となる かくの如きもろもろの塵勞を滅せんと欲はば 応に真実解脱の諦を修すべし もろもろの世間の仮名の法を離るれば 則ち清浄不動の処を得るなり…

或はまた堅牢比丘の壁上の偈に云く、生死の断絶せざるは 欲を貪り味を嗜るが故なり …憶想して妄に分別するは 即ちこれ五欲の本なり 智者は分別せざれば 五欲則ち断滅す 邪念より貪著を生じ 貪著より煩惱を生ず 正念にして貪欲なければ 余の煩惱もまた尽きん」(P四七―四八)。

こうした経文にてらして薫・大君の思念や行爲を見ていくと、経文が

説く教えを逆行しているのではないか。薫は「出世解脱ノ道」を歩み出しながら、妄りに分別をはたらかせ、五欲や五陰を盛んにさせ、貪欲執著の煩惱をつのらせている。大君とて邪念を尽くしているではないかと思える。これが真実の姿で、解脱はかなわぬものと作者は意図していたのだろうか。そうではあるが、その内実を詳しく説明しなくてはそうは言えない、もしくは詳しく説明していつてはそうでないとやることになつたりするだろう。

これまで「橋姫」以下三帖を読んできて、私の方は詳細と言えないが、「あれある故にこれあり」の因果が精緻にはめ込まれているのを見てきた。中村元選集『空の論理』で教えられるのは、『中論』が「あれ」が原因で「これ」という結果が生じるという解釈を否定している、「相互依存性のみの意味なる縁起」が言われているということ。もろもろの事物(諸法)はそれ自体の本性を欠いていて縁起せるゆえに成立している。だから縁起は空であり無自性である。「空および無自性が縁起すなわち相互依存ないし相互限定の意味である……この相互限定ということは、二つ以上の連関のあるものが、一方から他のものに対して否定的にはたらくことである。相互依存というのも、ひとつのものが、それ自身で成立し得ないがゆえに他のものの力をまつのであるから、やはりそれ自体のうちに否定的契機を蔵しているといひ得るであろう。「縁起」というと肯定的積極的にひびくけれども、実は否定を内に蔵した概念であるといわなければならない」(P二五三)。天台宗の「三諦偈」「因縁によつて生ぜられたものは空である。これは確かに真理であるが、しかし、われわれは空という特殊な原理を考えてはならない。空というのも仮に設けられたもの(仮名)であり、空を實體視してはならない。ゆえに空をさらに空じたところの境地に中道が現れる。因縁によつて生ぜられた事物を空じるから非有であり、その空をも空じるから非空であり、このようにして「非

有非空の中道」が成立する。すなわち中道は二重の否定を意味する。ほぼこのように、シナ以来伝統的に解釈されてきた。そうして天台宗ではこのような見解にもとづいて、『三観』の説を立てるにいたつた。

〈空観〉とは「仮より空に入る観」といわれ、世人の常識的立場の否定であり、「我」のとりわれからの超脱の立場を示す。

〈仮観〉とは「空より仮に入る観」といわれ、空観を完全に徹底するところに現われ、仏の智慧に照らされた現象世界を肯定する立場を示す。

〈中観〉は、以上の二つの〈観〉が別々のものであると考える見解をのり超えて、両者ともに並べて用いる意義があるとする立場を示す。

天台宗の教学では、以上の三観のうち、いずれの観にも他の二つの観を具えているということを強調する。そうして天台宗の観法では、一心三観を説く、すべての事象・存在がそのまま相対的思惟を超えた真実の理法にかなうことを体得する実践をいう。ひとおもしろい心のうちに、空観・仮観・中観の三観を同時に観ずることをいう」(P二九六)。

思うにまかせぬところに感じる苦。なんとか心晴々とした状態ではない。仏教は煩惱のもとを心の分別にあると言う。言葉や概念によらない、区画されない全体。それが空、無だと。しかしその空を實體視してはならないと。そう教えられても我々の心は感覚や思念などさまざまにはたらく。その止滅はありえない。この矛盾をどうこえるのか。薫・大君の物語だけでなく、人生を深く考えていつてはどうしても齟齬、葛藤を生じざるをえないだろう。更に言えば物語自体が作者の思念の編み合わせで現実そのものではない。にもかかわらず現実よりも真実を伝えるという逆説をもつたりする。巻ごとに書き継がれていった源氏物語は作品全体均質な時空を作っていない。大君は「橋姫」では見られる人語られ

る人であったが、「総角」に至るとその心のうちを綿々と語る人と変わっている。しかしその自在さ、融通無礙において新たな地平を開いた。

ともあれそもそもが複雑に成り立っている心。さまざまな体験を経て、多くの事柄を学んで、それはどのように心にやどされているのか。今日なお明確になっていない。雑多を整合・統一して、日々使い慣れた論理なり感覚回路を我々は用いている。ひとたび心の表層を分け入ると複雑多様であつて、きりはてなく思い悩み、他者もそうであり、他者とのかわりには思うにまかせぬものとなる。

例えば「宿世」をめぐる、大君のもとのお女房は心晴々の局面では「思ふやうなる」とたたえ、不幸において「思ひの外」と悲嘆する。大君も独りにあつては「身を心ともせぬ世なれば」と思い至るが、薫のかかわりで「目にも見えぬことに」と口にする。こう言い切る大君は「深き御心のほど」と言われる聡明さを持つが、鋭利はもの思いを纏綿させ、死を選びとりさえする。おどかな心を持った中君が苦しみを経て、幸い人になっていくのとは対照的に語られている。

「総角」のはじめの方で、弁が同輩の言葉として「松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の棄てがたきによりてこそ、仏の御教へをも、道々別れては行ひなすなれ」(P二一九)がある。人々の営為の積み重ねで、仏教が諸宗派に別れてある現実を言っている。さりげない形で物語作者の真情が吐露している。「宿世といふらむ方は、目にも見えぬことに」と大君が語る言葉もこうした片鱗と思える。手に取れぬ目に見えない概念や観念を捨てよ、そうして開ける「ありのまま」(真如)につけて仏教は教える。

思うにまかせぬ苦界であるここから、安樂のかなたを目ざす。あるいは無明の凡夫から悟りの境地、涅槃(ニルヴァーナ)を得ようとする。

薫はこうした求道者として語り起こされながら、しだいに煩惱に染汚されていくことが語られているのを見てきた。実は仏教はニルヴァーナがかなたにあるのではなく、ここにあると教える。以下中村元『空の論理』に従う。この世の諸現実(諸法)が相依って相互限定において成立している縁起ここそが、実相、如実、真性である。しかし「諸法実相は、概念的に把握することができないものであるから、ことばをもって他人に伝えることもできないし、また他人から教えられるということも不可能である。まったく各自がみずから体得すべきものである」(P二七二)。

「相互に相依って起こっている諸事象が生滅変遷するのを凡夫の立場から見た場合に、生死往来する状態または輪廻と名づけるのであり、その本来のすがたの方をみればニルヴァーナである。人が迷っている状態が生死輪廻であり、それを超越した立場に立つときがニルヴァーナである。輪廻したというのは人が束縛されている状態であり、解脱とは人が自主的立場を得た状態をいうのである。…ニルヴァーナという独立な境地が実体としてあると考えるのはならない。ニルヴァーナというものが真に実在すると考えるのは、凡夫の迷妄である。…それと同時に輪廻というものも、また実在するものではない」(P四三三)。

「われわれの現実生活を離れた彼岸に、ニルヴァーナという境地あるいは実体が存在するのではない。相互連関において起こっている諸事象を、無明に束縛されたわれわれ凡夫の立場から眺めた場合に、輪廻と呼ばれる。これに反して、その同じ諸事象の縁起している如実相を徹見するならば、それがそのままニルヴァーナといわれている。輪廻とニルヴァーナとはまったくわれわれの立場いかに帰するものであって、それ自体はなんら差別のあるものではない。…われわれ人間は迷いながらも生きている。そこでニルヴァーナの境地に達したらよいな、と思っている。しかし、ニルヴァーナという境地は、どこにも存在しないのであ

る。ニルヴァーナの境地に憧れるということが迷いなのである。したがって繫縛も解脱も真にあるものではない。一切は無縛無解である」(P四三六)。

「したがって解脱というものも、なんら特殊なものではない。

『一切はそのように「真実」である。』また「一切はそのように「真実」であり、またそのように「真実」ではない。」「一切はそのように「真実」であるのではないし、またそのように「真実」ではないのではない。」「それがもろもろのブツダの教えである。

他のものによって知られるのではなく、寂靜で、戲論によって戲論されることなく、分別を離れ、異なつたものではない。これが真理の特質(＝実相)である。：

「もろもろの事物の真の本性は」同一のものでなく、異なつた別のものでもなく、断絶するのでもなく、常恒に存在するのでもない。これが世の人々の主であるもろもろのブツダの甘露の教えである。』

〔中論〕一八・八一―一二(P四四〇)。

戲論とは形而上学的論議、分別が言葉に現れることを言う。一切の分別を離れ、さらにあらゆる対立を超越しているニルヴァーナ。

「中観派は縁起している諸事物の究極にニルヴァーナを見出したのであるから、諸事物の成立を可能ならしめている相互依存関係を意味する諸法実相が、すなわちニルヴァーナであるとも説かれている」(P四三三)。

ブツダの甘露の教えを得ても、源氏物語を読む私に新たな世界が見えるというのではない。諸事物の究極、諸法実相、ニルヴァーナが私に示されても、そうなのかと私が理解しても粗大な理解で微細な理解ではない。だからなのか、私は昨日までの感じよう、考え方、行いを変えない。究極の真理を認め合うものがない、そのものどうしの異なりは依然残る。愛するものどうしであれ、その異なりにおいて争ったり和合したりする。こうした私なりの結論に至る。

宇治十帖前半で薫と匂宮の二人が宇治八宮大君中君とかかわっていき、さらに女房などが加わって物語が相対化されて展開していくことが正篇と異なる。その異なりを生んだ一つに、作者がより深く人の世、心の真実を求めたことがあつただろう。探究の支えとして仏教思想があつた。その中心をなす相互依存、相互限定の縁起が源氏物語続篇に透けて見えるように思える。

「橋姫」「椎本」「総角」の物語世界で、俗聖八宮をはじめとして思うにまかせぬ苦を脱け出ている人はいない。しかし物語には登場してないが、「我」のとらわれを超脱して、人の世の実相を微細に見入ろうとしている人の存在が感じられる。思念をはたかせて物語を作り出している人の存在が。

(平成七年十一月二十七日受理)

